

昭和55年（1980）5月18日『日本経済新聞』の「ライフワーク」というコーナーに、余暇を楽しむ古地図愛好家と紹介され、記事になったことがある。

ところが新聞が出た翌日、取材記者から電話があって、千葉県に住む読者から、私が話した記事の中に「思い違いをしている個所があるので、ぜひ会って話をし、ついでに浅草の話もしたい」と、新聞社に電話が入っているというので、何事かと構えてしまった。

内容を聞いてみると、私が話した中の「幸龍寺という寺は、関東大震災で焼失し、その引っ越し跡に、今の国際劇場ができた」という部分で、その読者は「幸龍寺は、震災前に移転しているから、焼けてはいない」という主張だった。これは明らかに読者の勘違いと、判断できたので安心したが、念のため北烏山の幸龍寺に電話を入れ、確認を取った上で読者にも伝え、一件落着きということになった。

さて前置きが長くなったが、そんないきさつから日経新聞読者こと、山中四郎（当時83、4歳）さんとは、その後親しくするようになったから、不思議なご縁である。これは、山中さんの自己紹介の中に「以前、私は赤坂のたいこもち（別名ほうかん幫間）で……」というところに、引かれたのかも知れない。人を逸らさない見事な話っぷりは、さすが商売柄と、ずいぶん勉強をさ

せていただいた。

馬道で育ったという山中さんからは、浅草のむかし話を沢山聞いたが、「子供の頃、弾さんのお屋敷にお使いに行った」という話は、天の声のようで、小躍りするほどうれしかった。

山中四郎さんの話、「子供の頃、馬道七丁目七番地（現・浅草六丁目の内）に住んでいた。養い親が福島といふ、子供時分には早染めの紺屋（染物屋）だった。弾さんのお屋敷に染物のお使いで、お届けに伺ったことがある。立派な門が、山谷堀から左に曲がるとあって、お使いに行くと子供だったせいも、よくお菓子などを頂戴した」という内容であった。

山中さんの子供の頃を、10歳ぐらいと特定すれば、明治40年頃の事と推定できる。堀沿いの道を風呂敷包みを抱え、歩いて行く山中少年が、墨絵の中の人物のように見え、私にとっては大事な聞き書きの人である。



船宿があった頃の聖天橋（昭和50年（1975））